

「ただ静かに暮らしたい」



自宅にほど近い大浦湾を見る渡
具知武清さん。沖縄県名護市で

辺野古移設反対 19年続ける男性

平和な場所です静かに暮らしたい。ただそれだけなのに。米軍普天間飛行場（沖縄県）の名護市辺野古移設に抗議し、予定地周辺でろくそくをともす活動を続けて約19年。名護市瀬嵩に住む測量士渡具知武清さん（66）は「国はここで暮らす私たちを無視している」と、やるせない気持ちを吐露する。――面参照

第一回口頭弁論が行われた30日、渡具知さんは福岡高裁那覇支部を訪れ「なぜ国が県を訴える訴訟に発展するのか。国は力で押さえ付けようとしている」と怒りの表情を浮かべた。

渡具知さんの住む集落は、訴訟の要因となった軟

弱地盤がある大浦湾に面している。美しい水色の海は、沖に向かうと急激に深くなり、濃い青色に変化する。海は豊かな漁場でもあり、宝物だと思ってきた。その一部が、今後の工事を見据えた国によって、ブイで仕切られている。「大浦湾側と隣り合う辺野古側の埋め立てで海がよどみ、護岸整備の影響で潮流が変わった。湾内を回遊する魚もいなくなった」と肩を落とす。

渡具知さんはこの地区で、沖縄戦を生き抜いた父親と、米軍基地でメイドとして働く母親の下に育った。測量士の専門学校を経て、30歳で地元で測量事務所を開いた。長男が生まれ

た1997年、基地の移設構想が浮上した。住民投票を求め、署名集めに奔走。「やっとできた子どもでね、この場所ですと暮らせるようにしたかった」と振り返る。

投票で移設反対の民意を示しても計画は止まらなかった。2004年11月からは、移設予定地に隣接する米軍キャンプ・シュワブ前で、ろくそくの火をともして「海を守るろく」と訴えてきた。

「基地ができてしまったら子どもたちに申し訳ない」と寂しげに語る。だが、渡具知さんの意志は揺らがない。「この海を直接見ても

らえたら、反対する理由は分かると思うんだけどね」